

## 棕鳥と農夫の作業

和田 千 藏

森林に害虫が集団発生した時に、野鳥が集来して駆虫した実状は、見たことはないから、ムクドリが田植の際、農夫と協力して害虫を捕つていた実況を紹介して見度い。

ムクドリの駆虫功績は、すでに万人の認識するところであるが、田植の際、農夫と同じ田の中で、一方は田をかき起し、一方は出てくる害虫を啄むとゆう事象は、趣きもあり、又農業上有益なことでもある。昭和二十八年六月十三日午前八時五十分頃、青森県東津軽郡新城村（駅附近）で、五人の農夫が田植をしていた。うち三人は插秧作業、二人は馬一頭と代掻作業して別の田におつた。ムクドリとの交渉はこの代掻作

業の田面に展開された。代掻によつて田の土塊や堆肥が碎かれるために、その中に潜んでいたケラが出てきて泥の表面に現われるから、ムクドリがこれを対象として啄みに集まるのである。以前からムクドリがケラを育雛に用いることは見ているが、代掻でも荒代と中代とはどうしても水が多いため、水面を泳いでいるケラを捕るには余程苦勞するように見うけるが、植代になると、水はなるべく落して馬耕をかけるために、出てくるケラを捕るには都合よくできてい

る。青森県では、田植の時期とムクドリの育雛期間とほぼ一致している。田植は五月下旬から六月中旬頃であるが、ムクドリの営巣場所附近の水田によく集まるのである。昨年見た現状は、一枚の田（一筆）は約一畝歩位であるが、代掻には馬一頭と農夫が二人で仕事を進める。ムクドリは代掻の背後に八羽の小群で稼ぎまわる。馬耕の進んだ跡にケラが出て来るから、忙しく啄喰する。馬耕が廻つてムクドリにちかずくと小

幅にとび移つては虫を拾い、馬耕の背後へ

とびおりて虫を喰べる。となりの植えている田面にはおらないで、代掻している田にばかり集まるので、農夫が高声でどなつても敢ておそれない。全く人が飼つていたムクドリのように人に接近する。この現状はカメラにしたかつたが、不思議に用意していなかつた。あまり嬉しくて「農夫は代掻きムクドリは虫を喰う」といふだした。樺兵衛の種子蒔とは反対になる。ケラを喰べに集めることは農夫も認めているから、別に追立てもしないでよろこんでいる。そして今の一群は親子一族のものらしく、親鳥らしいものは、すべての行動を統率していたらしい。そうなると、これは巣立した新仔と共に、ケラ喰いの運動に出たのにちがいない。

彼等の食餌としてのケラは、体量も大きく質も軟かで啄み易く、その上栄養もよいために好むのであろう。そしてこの場合には、育雛のため遠所の巣にはこぶ必要もなく、人間のそばで楽々美食するのであるから、まず人間を信頼するのであろうといふ度い。

自分が見ている十分間位に、少くも二十匹のケラと、外の害虫が喰べられたと思われる。こゝに於て農夫とムクドリとの関係は、農夫がムクドリにケラを捕りやすくしてやる。ムクドリはケラを農夫に代つて捕つてやるとゆう一つの交換条件みたいな交渉が自然に生じるのである。

ムクドリはこのように人を信頼する特性の持主であるから、人家やその他の建物に巣をつくつたり、又巣箱をよく利用したりして、さかんに種族発展の本能を発揮している。

ムクドリと田植作業との関係は、こんなものとして、次にムクドリの植物質餌索行動につき一言しておき度い。ムクドリは甘い果実を好み、サクランボ、オランダイチゴ、グミ、アンズ、ナワシロイチゴなどの甘味強い実を啄み、酸味の強いものはそれほど好まない。

又、八月頃、島のトウモロコシの実ができる頃集団して啄むので、農夫にいやがられる。この行動はハシブトガラスが先にトウモロコシの果実の皮を破り荒したものに

集まるのが普通のように見うけられる。人の作つた農作物を多少害しても、害虫を喰べてくれる方も少くないから、それ程害鳥とにくむべきでない。農家が知らないうちに駆虫の功を残していることを考えなければならぬ。

ムクドリは、カケス、ヒヨドリ、イカル、コムクドリ等と共に、色々の林木やその他の植物の種子散布の勞をとつてくれる。私のつとめている弘前大学教育学部は、弘前公園の一角に建てられ、校舎の四周は老松の林に包まれている関係上、四季を通じて諸鳥百千鳥に訪られ、殊に生物園林内実験区はムクドリの大群のねぐらとなる関係上地上におちる糞中の種子が発芽し、色々の新苗が発生するので、昨年八月三十一日迄にウルシ、ニワトコ、サクラ、ツタ、ツルマサキ、グミ、ケヤキ、クワ、ノブドウ、ナワシロイチゴなど十種をかぞえた。これは全部ムクドリの糞苗とはいわれぬが、とにかく種子散布の勞をとつてくれることがわかる。

(弘前大学教授)